

〔学 会〕

東京女子医科大学学会 第233回例会抄録

日 時 昭和55年6月27日(金) 午後1時30分より

場 所 東京女子医科大学本部講堂

1. 体表の温度点、特に冷点に関する二、三の知見

(第二生理セミナー)

○小沢 隆子・金光 宗代・佐藤 栄子

(麻醉科) 山村 佳江

thermoaesthesiometer を用いて、体表の異なつた部位の単位面積あたりの温度点の数を測定し、測定値の再現性、冷点と温点の数の差、体表の部位による冷点の数の相違を検討した。

20歳の女子3名について、一定温度に空調された部屋で測定し、右手背部の冷点と温点の数を同一日時に2回連続測定した。2回の測定値の算術平均値に対するそれぞれの測定値の偏差は、10%以内であつた。

3名とも、温点の数より冷点の数が多かつたが、測定と冷点の数の比は異つていた。

被験者のひとりの、上肢および前腕内側の一定部位の冷点の数について、異つた日の同一時間帯に、2回あるいは数回の繰り返し測定の結果得られた値は、いずれの場合も10%以内の偏差であつた。

同じ被験者の体表の広範囲にわたつて冷点の数を調べた結果、上肢では、内側に比較して外側にやや多く、体幹では、背側に比較して腹側に多い傾向がみられた。下肢では、やや複雑な結果を示し、上腿部は外側に比較して腹側ないし内側に、下腿部は外側に冷点の数が多い傾向がみられた。

同一の測定日に、冷点の帯状分布を調べた結果からは、腹側、背側あるいは内、外側による相違が、より明らかにみられた。このことは、臨床上、冷覚鈍麻帯を調べる際に留意すべきことを示している。

2. 最近の菌血症についての二、三の考察

(臨床中央検査科) ○熊田 徹平・清水喜八郎

近年の菌血症について、宿主側の要因を中心に考察を行なつた。

1) 本学の本院、心・消・脳各センター、第二病院の菌血症例について年齢との関係について解析した。その結果、60歳以上の高齢層が全体の35.7%を占めていた。グラム陰性桿菌についての検討してみると、60歳以上の層が40.9%であり、29歳以上での21.5%に比べ高齢層に多い傾向が強かつた。とくにセラチア感染症においてその傾向が強くなり、60歳以上の層が全体の53.7%をしめていた。これらのことは高齢層において感染に対する抵抗性が減弱していることを示唆している。

2) 近年はグラム陰性桿菌血症の増加が目されているが、グラム陽性菌による菌血症も少なくない。とくにグラム陽性球菌のうち最近では *Staphylococcus epidermidis* の増加が報告され、またグラム陽性有芽胞菌の *Bacillus cereus* の菌血症例も報告されてきている。最近経験したそれら症例について臨床細菌学的検討成績および治療上の問題点について報告した。とくに前者については *Coagulase* 陰性 *DNase* 陽性菌について若干の検討成績をのべ、後者の問題については抗菌剤感受性の問題に言及した。

質 問

竹内富美子(内科I)

約10年間における菌血症の検出数が最初のスライドに出ていましたが、1978年、1979年、特に1979年の検出数が多く出ていましたが、この約10年間の菌検出に関する培地などについては、同じものを使用したのでしょうか、または何か違つたものを使用したのでしょうか。

答

熊田 徹平(臨床中央検査科)

菌の検出に関しては特に変わつた点はありません。検体提出頻度との関係などは今回はみておりません。

3. 前立腺酸性ホスファターゼ(PAP)の Radioimmunoassay

(ラジオアッセイ科)

○野村 武則・地 曳 和子・小田桐恵美・

出村 黎子・出村 博

前立腺酸性 ホスファターゼ (以下 PAP) は前立腺表皮細胞で生成され、前立腺組織に最も多く含まれている分子量約11万の糖蛋白で、前立腺癌で血中 PAP 値は上昇するため、前立腺癌の診断、治療に PAP の測定は有用なものと考えられている。

従来 PAP は酵素活性法で測定されていたが、最近、特異性が高く感度の優れた PAP 測定用のRadioimmunoassay (以上 RIA) Kit が栄研 ICL で開発され、われわれも使用する機会を得たので、基礎検討および臨床的検討を行なった。

方法は血清 100 μ l を使用した二抗体法による RIA で、得られた標準曲線の測定範囲は 1.25~80ng/ml、測定感度は 1.25ng/ml であった。回収率は平均96%、高濃度検体の希釈曲線も標準曲線に平行し、Within-assay および Between-assay の変動系数も低濃度以外は5%および10%以下であった。加齢による PAP 値への影響は、前立腺疾患を伴わない30歳~82歳の男子358例について検討したが、年代による PAP 値の差は認めなかった。358例の $\bar{x} \pm SD$ が 1.54 \pm 0.51ng/ml より、PAP の正常範囲を 3ng/ml 以下とした。また前立腺肥大症17例中3例で正常上限よりやや高目の値であったが、他の14例では正常範囲内の値を示した。前立腺炎1例、泌尿器科悪性腫瘍7例および良性疾患5例ではすべて 3ng/ml 以下の値であった。前立腺癌の未治療4例中、stage B の1例は低値であったが、他の stage C.D の3例の PAP は非常に高値であった。前立腺癌の治療後の13例はすべて低値であった。

以上より RIA による PAP の測定は、未治療の前立腺癌を前立腺疾患、泌尿器科悪性腫瘍および良性疾患との鑑別診断に、さらに前立腺癌の治療経過や治療効果の判定の指標として意義があると考えられた。

(最後に患者血清提供に御協力いただきました京都府立医科大学・泌尿器科の大江宏先生渡辺映教授に深謝いたします。)

4. 大都市における妊婦の分娩施設選択指向

(第一衛生) 土井 道子

人口動態出生票から、出生と施設との対応状況を調査し、妊娠が分娩施設選択にみせる指向性を知ることは、地域の母子保健計画への手がかりをつかむ意味からも重要である。

新宿区、荒川区、田無・保谷市の3地区の昭和50年出生票付票計10478から、住民の選択した出生施設とその

所在地を調査した。

出生の自区・自市内施設利用は、新宿区の56.4%が最も多く、田無・保谷市は44.9%と最も少ない。自区・自市内施設に次いで多く利用されているのは、新宿区と荒川区では隣接区・市の施設であり、荒川区の25.7%が最も高率である。自区・自市内と隣接区・市の計は、新宿区71.8%、荒川区75.2%、田無・保谷市61.5%で荒川区が高く、田無・保谷市が低い。田無・保谷市では、自市および隣接区・市以外の都内の割合16.6%は、隣接区・市と同じで、他区に比較してやや離れた地区の施設、主として都心方向の医療施設の利用が目立つ。

「里帰り分娩」とみられる都外施設出生は、新宿区と田無・保谷市が20%弱で多く、荒川区は14.8%と最も少ない。また都外施設における病院、診療所、助産所の割合は、病院が50%前後で都内施設に比較して低く、診療所は40%強、助産所は10%弱といずれも高い。

自区・自市内施設利用と、住居地からの距離との関係を見ると、病院は1500m 以内から、診療所では1000m 以内からの選択が、それぞれ70%と、80%を示し、妊婦にとっては身近な分娩施設への希望が強いことがわかる。

分娩施設選択にみせる妊婦の指向は、すべての地区でみられる近距離施設指向、都心方向への病院指向、里帰りをまず優先させるものなど、多様であり、現状では妊婦自身の選択に任されている。

5. 蝶形骨洞粘液嚢腫の1例

(耳鼻咽喉科)

○服部 礼子・高橋 正紘・上村 卓也
(脳神経センター) 清水 隆・能谷 正雄

最近、トルコ鞍から斜台にまで及ぶ広汎な骨破壊像を認め、診断困難であった巨大な蝶形骨洞粘液嚢腫の1例を経験したので報告した。

症例は52歳男性、両側副鼻腔炎手術の既往歴がある。昭和54年7月初旬左側頭部痛で近医受診し、三叉神経痛の診断のもとに治療を受け軽快した。7月中旬複視出現して東京女子医大第二病院受診、眼科的精査を行なったが原因不明で同脳神経センターを紹介された。8月末には複視は消失した。頭部単純撮影でトルコ鞍から斜台に至る骨破壊像を認め、CT scanでトルコ鞍内腫瘍を疑われ入院精査となった。脳血管撮影、眼窩静脈造影、CT scan で蝶形骨洞周辺の悪性腫瘍も疑われて当科受診した。鼻所見では右鼻腔にポリープ様腫脹を認める他に異